

企業名： 井関農機

レポート名： ISEKI レポート 2022

1. この会社が目指す姿が理解できるか

「『お客様に喜ばれる製品・サービスの提供』を通じ豊かな社会の実現へ貢献する」ことを基本理念としており、このための長期ビジョンとして、農業と農家を支えることで、持続可能な食・農・大地の未来を創造していくことを目指す、「食と農と大地のソリューションカンパニー」が掲げられている。この目標の実現に伴い、「2.飢餓をゼロに」、「13.気候変動に具体的な対策を」、「15.陸の豊かさを守ろう」などのSDGsの実現も視野に入れていることがわかる。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

2020年特許の日本における、特許分野別登録数（その他特殊機械分野）が2位、また全産業の中で特許査定率が1位であることから、新技術の開発、実用化に優れていることがわかり、この高い技術力は競争優位を得られるものであると同時に、ロボット技術やICTなどの先端技術を駆使した、井関農機が推進するスマート農業は現代の社会にとって不可欠なものであると考えられる。また、2015年に井関グループが設立した夢ある農業総合研究所では、国や自治体、JAなどと連携しながらスマート農業の研究・実証・普及に取り組んでおり、ここで得られた成果を顧客である生産者のサポートにつなげている点は、信頼を得るという点で競争優位につながると考えられる。外部評価として、DBJ環境格付では16回連続で最高ランクと評価されており、社会的な評価も良好であると考えられる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

「開発」「生産」「販売・サービス」の分野でそれぞれIETC、ITTC、IGTCという施設が設けられ、一貫した専門の人材育成体制が構築されていることにより、今後も安定して高い技術力を持った人材が育てられると考えられ、これは競争優位性の持続につながると理解できる。また売上高、営業利益率は堅調に増加しており、技術開発を支える資金調達の面においても持続性があると考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

競争優位性の持続の項目で上げた人材育成施設で自身のスキルアップが見込まれると考えられる。特にIGTC(ISEKIグローバルトレーニングセンター)では商品利用研修を行っており、大学で学ぶ商学の知識を基にした効率的なマーケティングスキルの上昇が達成できると考えられる。また、技術者として働く場合には、コンクールの開催や、優れた発明に対する表

彰などで開発意欲が高まる環境に身を置くことができるため、創造性の向上につながると考えられる。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

企業が目指す姿として、長期ビジョンの実現に向けた中期経営計画には、2025年度の営業利益率5%などの具体的な数値目標が挙げられているが、長期ビジョンには数値目標が示されていないため、農機からのCO2排出削減量などを数値にして目標にすることで目指す姿をステークホルダーがより明確に理解できると考えた。また、人材育成に関して、技術力の維持のために優れた技術者の創出に強く力を入れていることが伝わったのに対し、各人材育成施設での具体的な活動が不明瞭であるため、その部分をより詳細にするとさらに関心が集まるのではないかと考えた。